



TITLE:

<批評・紹介>劉子健博士頌壽紀念
宋史研究論集刊行會編「劉子健博
士頌壽紀念宋史研究論集」

AUTHOR(S):

伊原, 弘

CITATION:

伊原, 弘. <批評・紹介>劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集刊行會編「劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集」. 東洋史研究 1991, 50(1): 158-170

ISSUE DATE:

1991-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154344>

RIGHT:

劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集刊行會編
劉子健博士頌壽紀念宋史研究論集

伊原 弘

中國史において宋代が重要な變革期であることは贅言をまたない。多くの研究者があらゆる角度からこの變革期に挑み、一際膨大な成果が中國史研究の上に輝く。しかも、この分野では早くから國際協調が行なわれた。故エチエンヌ・バラージ氏の提唱によつて進められたこの國際協調は多くの成果を生んでいる。宋代史研究は、このような面からいっても、中國研究を領導しうる重要な分野である。かくのごとき状況にあつて、米國プリンストン大學教授劉子健博士は、國際交流と協調による研究をさらに推進し、それに獻身されたことで夙に名高い。本書は博士の退職と頌壽を記念して編まれた一大論文集で、規模の大きさ、内容の廣さ、寄稿者の質と數からいっても類例を見ない金字塔的な論集である。多年にわたる博士の努力と貢獻がこのような論集を完成させたのであり、まことに慶賀に耐えない。

博士の學界への貢獻はいまさら云うべき點がないが、巻頭の略歴及び著作一覽、さらには斯波義信氏の手になる小傳が博士の業績及び研究への情熱と苦難に満ちた時代を経験しつつも揺るぎのない確信のもとに切り拓かれた學究の人生をあますことなく傳え、讀むも

の心を打たずにはおかない。このような信念と情熱こそが、博士を研究と國際協調の確立に努力させたものではあるまいか。

博士の國際的研究者育成への獻身も有名である。博士のもて學び、收穫を得た研究者は少なくない。評者は殘念ながら直接その聲に接したことがなく教示を受ける機會も持たなかったが、それでもなお幾多の心遣いを戴いて來た。これらは、宋代史研究に攜わるものたちが等しく戴いた恩恵であろう。今回、博士に、このような空前の論文集が獻呈されるにいたつた背後には、かくのごとき事情があることはいふまでもない。それゆえに、寄稿者も日本からは勿論のこと米國、西歐、中國、臺灣、香港からと文字通り國際的となつた。このように多國籍の研究者で構成した結果、本書は現在の中國研究の基礎的言語である日中英の三箇國語で構成されることとなつた。いままで、複數以上の言語で論文集を構成した例がなかった譯ではない。だが、それらは組織的に編纂をはかつたとは言ひ難く、これほど計畫的に詰められていなかった。その意味では、今後の國際的論文集のモデル・ケースの一つになりえよう。

論文の日本語の抄譯を附したことも意味が大きい。どちらかといえば、英文で書かれた文獻を参照する習慣の乏しい我が國の中國史では、譯出語彙が共通の認識をうみ、問題意識にも共通のものが生れよう。すなわち、このような努力は、日本の宋代史研究者に外國の研究の水準に目を向けさせ、ひいては日本の水準を一層押し上げていくからである。本書の編集を提唱し盡力された衣川強氏を始めとする關係各位に心から敬服する。

末尾に執筆者の履歷が記してあるのも、特徴の一つである。述べたように、國際交流が活潑化しているにも関わらず、相互の研究者

及び研究狀況に關する知識は十分でない。たとえば、中國においては『宋史研究通訊』があり、米國でも *Bulletin of Sung Yuan Studies* があるが、我が國ではこのようなものが發行されてゐない。最近 Peter K. Bol 氏の『Sung-Yuan Research Aids II』出版された *Research Tools for the Study of Sung History*, Press of Journal of Sung-Yuan Studies. に掲載された日本の文獻目録も出版年代が古いうえに繼續的なものがない。ここからも、最近の日本の學會や研究者が定期的な情報把握と公開に組織だった努力をしていないことが窺われる。あまりに斷代史に偏った活動は大きな弊害を生むとも考えるが、中國研究の一翼を擔う日本としても一考の餘地があるのではないか。その意味からもこうした研究者リストは相互の交流に役立つものとならう。

二

本書は、中文、和文、英文の順で配置され三箇國語の各タイトルも掲載されているが、ここでは日本語の題目のみ示した。なお、共同執筆もあって、執筆者數と論文數の不一致はここからでている。

王會瑜 南宋後期、揚州駐屯部隊の名稱と現存する揚州城軼文の檢證

王雲海 『宋會要輯稿校補』續論——並びに藤田本『宋會要』

「食貨・市舶」の稿本の檢討

王德毅 宋代澶州晁氏の家系について

田浩 (Hoyt Cleveland Tillman)・俞宗憲

金朝の思想と政治制度について

朱瑞熙 宋代の理學家——唐仲友

宋 曉 『宋史箋』遼・金傳を讀む

李 涵 宋代の檢正と都司について——宰相屬官の變化から宰相權の伸張を看る——

周寶珠 五代北宋期における開封城建設の計畫と實施
南宋機速房の設立より宋代の君主權と宰相權の昇降を論ず

林天蔚

徐 規 沈括の業績に關する年代史

梁庚堯 北宋神宗時代の西北邊境における軍糧の調達

陳高華 蒙古使節王楙の南宋派遣について

陳智超 宋代の書館と訟師

陳學霖 (Hok-lam Chan) 宋・金の二帝、碁で天下を爭う——

『宣和遺事』の史實——

黃寬重 南宋の茶商人賴文政の叛亂

楊德泉・任鵬傑 熙寧・元豐時代、農田水利法の施行に伴う地理的分布と社會的效果について

賈大泉 宋代四川の商品經濟の繁榮と交子の誕生

漆 俠 宋元時代の浦陽鄭氏の家族研究——宋元時代の社會階級構造の探求——

饒宗頤 宋代の潮州に赴任した官僚と蜀學・閩學——潮州における韓愈尊崇の由來——

鄺家駒 五代宋時代の官田の經營形態

竺沙雅章 宋初の政治と宗教

梅原 郁 宋代の郷司——その位置づけをめぐる——

草野 靖 南宋東南會子の界制と發行額

柳田節子 南宋期家産分割における女承分について

佐竹靖彦 瀘州江安縣生南耆

佐伯 富 宋代における牢城軍について

衣川 強 劉整の叛亂

宮崎市定 辨姦論の姦を辨ず

斯波義信 宋代湖州の聚落復原

John W. Chaffee 地位、家族、郷土——宋代の「登科録」の分析——

南宋における歴史像の定型化の展開——史彌遠の場合

Richard L. Davis

金朝の法律體系

Herbert Franke

Peter J. Golas 宋朝の鐵業政策

James M. Hargett 陳與義の詩に見られる唐風と宋風の矛盾

貿易、通貨政策、中國式「重商主義」

Robert M. Hartwell

見せ掛けの奇跡——十二世紀陝西の捏造された傳承

David Johnson

權力者の犯罪——陳執中の場合

Brian E. McKnight

宋代の史權

Conrad Schirokauer

狹介なる政治家・張商英

Helwig Schmidt-Glintzer

南宋高宗皇帝論

Jing-shen Tao (陶晉生)

王安石の改革運動新論

Ssu-yü Teng (鄧嗣禹)

十三世紀初頭の日中文化交流——中國における入宋僧俊昉

Linda Walton

宋初の武力均衡政策

これらは、さらにⅠ 歴史、Ⅱ 地理、Ⅲ 社會、Ⅳ 經濟、Ⅴ 政治、Ⅵ 法制、Ⅶ 宗教、Ⅷ 學術思想、Ⅷ 科學、Ⅸ 文學、Ⅹ 藝術、Ⅺ 書誌學の十二項目に分類される。ただし、Ⅸ 科學、およびⅩ 藝術は項目のみである。この結果、研究動向が一層明確になってくる。もっとも、こうした分類が妥當か否かは一考の餘地がある。分類と問題意識は別だからである。

この目次を通して最初に感じるのは、實に多くの研究者が多様なテーマに取り組んでいるという思いである。本書が宋代の諸問題をカバーするのではないが、各分野に過不足なく論文が掲載されているからである。項目の配分から見ると、興味や方法に偏りがありつつも、概して興味と問題意識は均一といえよう。宋代史研究といえは、北宋史、そして社會經濟史と制度史といったステレオタイプの發想だけでは捉えきれぬ多彩な問題意識が展開しているのである。ただ、全體的な傾向として、最近の中國史研究に特徴的な士大夫・思想に連動する研究が多いことが指摘できる。なお、學術思想、書誌學のように歐米・中國の研究者で固められた項目もある。これはその分野で我が國の研究が手薄だというのではなく、單なる人選上の問題だが、一つの潮流を示すものかも知れない。これも、述べてきたような、國際的交流が推進しているのではあるまいか。

最近は國際學會が多い。これは單に中國だけでなく、臺灣、香港にも共通し、正直なところあまりにも多すぎるという感がないでもない。安直で偏った構成のうえに、僅かな外國人の出席をもって國際學會と稱するものも少なくない。そのうえ、本來は純粹であるべき學術會議の開催に、様々な意圖が感じられることもあり、このままでは良いのかとも思う。しかも、中國研究の一翼を擔ってきた日本

で、積極的な學術交流の企畫に缺けることも問題である。しかし、このような現状が各國、各研究者の交流を密にしている面は否定できない。研究意識や問題意識、さらには研究者間の交流が進んでいるからである。このような成果の一端は本書にも見られ、研究テーマが著しく掛離れているとは言い難い。とはいえ、アプローチの方法や問題意識の發生には異なる要素も感じられ、興味をもたせる。以下、各章ごとに検討しよう。

三

述べたように、ここでは、各テーマ毎の分類に従って論評する。

I 歴史におさめるのは宮崎市定「辨姦論の姦を辨ず」、徐規「沈括の業績に關する年代史」、Helwig Schmidt-Glintzer「狷介なる政治家・張商英」、Jingshen Tao「南宋高宗皇帝論」、Linda Walton「十三世紀初頭の日中文化交流——中國における入宋僧俊祐」の各論である。宮崎市定氏は、蘇洵の「辨姦論」を當時の政治情勢および考證學の變遷を念頭に論じる。深い知識あつてこそその論文で、宋代の研究を領導して來られた泰斗として、思考や論の組み立て、史料考證はこのように行なうべきだとの指針も示される。まるで手慣れた得物を打ち振るう老練な武者を見ているようである。徐規氏の論文は『夢溪筆談』の著者として有名な科學者沈括の年代記である。優れた萬能人である沈括の出現と存在をどのように考えるか。梅原郁氏は『夢溪筆談』（平凡社、一九八一年）添附の小傳で、沈括は宋代と同じ地平の上に立つと論じるが、まさにその通りで、沈括もまた我が國の異能人平賀源内と同じく時代の子である。その意味をより深く研究してみる必要がある。

Schmidt-Glintzer氏は、北宋末の政治家張商英を論じる。張商英は『宋史』卷三五一の傳にあるように蔡京と交互に宰相をつとめたが、取り分けて功績が残る譯ではない。従つて、どちらかといえど我が國でも等閑視されてきた。例えば、『アジア歴史辭典』でも通り一遍の紹介で、取り立てた功績がないと片付ける。だが、考えて見れば英宗の治平二年に進士及第ののち王安石に登用を受けて宣和三年の沒時まで活動を續けた人物である。仕えた皇帝も北宋九代のうち、英宗・神宗・哲宗・徽宗の四代におよび、生涯も北宋一六六年の歴史のほとんど半分に達する。激動する政治のなかをしぶとく生きのびた變り身の多い人物として注目に價する。巧い設定と感心するとともに、このような視點こそ政治史に必要と感じた。從來の研究は、大きな事件や人のみを對象にしがちで、その背後に潛むものや日常の究明が十分でなかった傾向がある。これはまた、非常の世界の浮彫りにも不十分にする。こうした缺點を埋めていく發想といえよう。もっとも、論點は佛教との關係を主體にし、政治史というわけではない。

Jingshen Tao氏は複雑な性格の持主と指摘されてきた南宋初代皇帝高宗にスポットをあてる。すなわち、高宗の性格と政策は皇位繼承の正統性への希求と武將への不信からで、失地回復より君權安定を重んじた結果と論じる。Linda Walton氏は入宋僧の問題を論じる。我が國の日中交流史は、どちらかといえば日本史の分野として捉えられてきた。だが、紛れもない宋代史の問題でもある。當時の日本人が中國から何を吸収したのかは、中國文化の特質の追及でもあるからである。近年、江戸期の思想及び實學の検討に際して宋學について言及されることが多い。このような問題の眞摯な追及

に必要な視點と言えよう。

Ⅱ 地理 に所収するのは周寶珠氏の論文のみ。最近は水利・地理學的な論文は流行らないのか。近年、盛んな都市研究もこの論文一本で、いささか寂しいうえに特に目新しい内容でもない。開封が帝都として定着していった背景も、從來からの指摘とそう異なる譯ではない。最近、久保田和男氏は後梁の基盤であった開封が帝都として認識されていくのは唐末以來逼塞していた大運河によるのではなく、海運によって山東に搬運された物資を供給するに便のあったがゆえであると論じた(『史観』一一九、一九八八年)。もちろん、開封が統一王朝の帝都として昇華して行くのには大運河が必要である。だが、その根底において、華北の要所であることが必要なことも念頭におかねばならない。開封が帝都として成立していくうえで、なお複雑な要素があったことを考える必要があるのだ。開封に在住して研究を推進される氏には、地の利を踏まえた多くの知識と成果があると思われる。枚數の關係もあつて割愛された部分も多いと思われるが、今後とも一層の研究の進展を望みたい。

Ⅲ 社會 には斯波義信「宋代湖州の聚落復原」、王德毅「宋代澶州晁氏の家系について」、漆俠「宋元時代の浦陽鄭氏の家族研究——宋元時代の社會階級構造の探求——」、佐竹靖彦「瀘州江安縣生南著」John W. Chaffee「地位、家族、郷土——宋代の「登科錄」の分析——」、柳田節子「南宋期家産分割における女承分について」をおさめる。期せずして、日本人の論文の大半が社會史に入り面白いと思つた。社會史的な研究は、どちらかと云えば日本の研究者の思考に馴染まないと思つていたからである。また、ここに所収された論文の殆どが家族關係で、他の分野に所収された論文と合

わせて考えると、家族問題が依然として重要であることを再確認せられる。斯波義信氏は湖州の聚落復元によって、宋代の社會の秩序と形態、さらには時代的變遷の位置付けを探り、『嘉泰吳興志』および『夷堅志』所収の地名の詳細な分析によって、唐宋間の社會變化の激しさと次の時代への過渡的現象を提示する。唐宋間は地名が變動した時期で、その把握によって社會變化を立證することが可能である。地名の變化は當該地域の變化を意味するだけでなく、土地所有や管理形態の變化とも結びつくが、そこに地域差や停滞性、さらには落差があることも承知しておかねばならない。『夷堅志』にあらわれる通俗的地名がもつ意味の判斷も慎重でなければならぬ。王朝の把握と乖離した現象が内在することは指摘の通りであるが、そこから社會の實相を浮び上げさせるには、なお多くの作業が必要なることも指摘の通りである。

王德毅氏は能力主義であつたとする宋代社會にも知識人の家柄を誇る風潮があつたとして、澶州晁氏の家系を考察する。晁氏は南渡後も打撃を受けていないから、同様の名族呂氏とも對比しうる興味深い事例である。科擧による浮沈の多いはずの宋代にこのような家系が存在することはかねてより指摘が多く、システマ的にもそれを交えた恩蔭の制が論じられている。こうしたなかで、王氏は從來考察の乏しかった華北の一族を検證した。漆俠氏も同じテーマを宋元時代の浦陽鄭氏の家族研究で探る。ただ、視點は多少異なり、王氏が士大夫としての知的繼承を探るのに對して、家族管理の形態と經營の面から検討する。この點、一族繼承のあり方の深い解明となつた。このような究明が社會の深層を解明するが、それを交えるイデオロギーとは何か、一層知りたくなる。佐竹靖彦氏は瀘州江安縣

の少数民族生南者の分析により、地域の特色と社會の實相を論じる。この問題に關する氏の業績の深さには定評がある。多彩な論文を集めた本書でも、一定地域や少数民族に關する論稿は乏しく、その意味からも貴重である。本論では一括して捉えられがちな少数民族の内譯を細かく分析し、宋朝の對應と政策、そのなかで變遷する少数民族の内容をも詳細に分析される。宋朝の文化が中國に内在する諸民族にどのように影響したかは不十分な點が多い。從來の研究も概ね北方民族に關するものが主體で、華南の諸民族に關しては未だしの感がある。中國大陸のみならずアジアへ擴大していく中國の本質の把握には、このような諸民族に對應する政策と思想の研究も必要で、今後ともぜひ行なわなければならない。

柳田節子氏は新出の明版『清明集』を利用しつつ女子の財産權を論じる。女性史研究は最近活潑化しつつあり、研究史も回顧されている。これは大いに注目すべきで、中國社會の研究に新分野を切拓くことになるかもしれない。だが、その爲には、女性史をどのように位置付けるかを考えることも必要である。女性史研究は、おおむねその地位の低さに注目することで進んできたといつても過言ではない。それが誤りというわけではないが、ここにおいて、そのあり方を一考するときにきているように思う。女性史を意識の上で確立していない男性史に對抗するものとして位置付けるか、それともより一層歴史研究の裾野を擴げる項目として取りあげるかである。だが、現段階では、このような整理は充分でないように思う。もっとも、このような考えが女性史を特殊なものとして見ているという謗りを受けることになるかも知れないが、ところで、中國においては女性の地位低下の理由の一つに朱子學をあげるのを通例とした。だ

が、氏が指摘するように、朱子學の盛行は明代になってからで、宋代にはなお權利を有する例も見られる。したがって、もう少し別の發想が必要であらう。そもそも、宋から明への變化のなかで、家族やその管理維持システムはどのように變化したのか。また、家業のあり方はどのように變化したのか。最近、NIE S 諸國の研究をしている社會學者から、中國や韓國における家業の繼承、さらには家業を誇りにするという意識について質問を受け、答に窮した。なるほど、このような分析があつてはじめて、社會における女性のみならず男性・子供をもあわせた家や人々の實態が把握できる。その意味からも、女性の地位の變遷に關するステレオ・タイプの發想は、愼まなくてはならない。この點にも言及される氏の論稿は、單に女性史だけでなく、社會そのものに關する再考察の必要をも提示されたものとも受け取りたい。

John W. Chaffee 氏の論文は注目すべきである。『登科錄』の分析により科擧受験者の平均像を出すのは、實に巧い着想である。かねてより『登科錄』の巧い利用方法はないかと考えていたが、それを見事に示された。栗棘庵所藏の輿地圖にのせられた解額といい、利用すべくして利用しきれていなかった宋代史料が幾つかある。そういう史料を驅使され、宋代士大夫像を明らかにされたのは注目に價する。宋代士大夫の實像の捉えかたの一つに、法的に考える方法がある。そのようなアプローチが無駄だといわないが、いさか餘裕がなく硬直化した面がない譯ではない。幅廣い意味をもつ士大夫は、法的な範疇だけで捉えがたい要素が多く、より柔軟な思考で追及する必要があると考えていたが、ここにその成果が見られる。それにしても、最近の米國の成果は急である。急速にここまで

到達した底力には敬服せざるを得ない。日本の中國研究者も心すべきであろう。あげられた史料といい、發想といい、決して日本人の研究者に出来ぬ研究ではないからである。幅廣く歴史學の現狀を論じたバラクラフ氏は『歴史學の現在』(岩波書店、一九八五年)で、ライト氏の「東洋學の惡夢」という言葉を引用しつつ東洋學を擲論したが、まことにむべなるかなと思わざるを得ない。

IV 經濟 には Robert M. Hartwell 「貿易、通貨政策、中國式「重商主義」、鄭家駒「五代宋時代の官田の經營形態」、Peter J. Golas 「宋朝の鑛業政策」、賈大泉「宋代四川の商品經濟の繁榮と交子の誕生」、楊德泉・任鵬傑「熙寧・元豐時代、農田水利法の施行に伴う地理的分布と社會的效果について」、梁庚堯「北宋神宗時代の西北邊境における軍糧の調達」、草野靖「南宋東南會子の界制と發行額」などの論文が分類される。貿易と通貨政策を通じて中國に重商主義を採らうとする Hartwell 氏の論稿は面白い。宋代に行なわれた政策は、確かに商業を重んじその意味では重商主義的である。かつて、臺北の學會の Peter J. Golas 氏が宋代の經濟成長に GNP という言葉を使用したことに新鮮な魅力を感じたが、ここでもこの重商主義という言葉に魅力を感じた。その、Peter J. Golas 氏だが、ここでは鑛業政策を論じる。文明の進展のなかで金屬の果す役割は大きい。現在知られている金屬のなかで、約半数が使用に價し取り引きされている。科學の向上と社會の複雑化が、金屬の使用範圍と精度をあげたのである。この點、前近代の金屬使用は極めて限られる。これらの生産と鍛練の次第は單に科學史からだけでなく、社會の成熟度や質的な特色をはかる目盛にもなる。Golas 氏はこのように重要な意味をもつ産業に對する宋朝の政策を論じ、宋代

に鑛業が一つのピークを超えたこと、官僚の擄取などもあったが、政府の採掘政策については一定の評価を與えうることを論じる。氏の指摘のとおり、宋代には金屬生産が飛躍的に増大した。だが、中國の人的巨大さと到達した文明の内容を考えると、増大した生産額が必要な絶対量を凌駕したか、逆に宋代にふさわしい使用を行なったかどうか疑問でもある。後世、廣東の鐵が有名となり重要な輸出品となった。だが、輸出品になるほどだからといって、過剰品だとは限らない。逆の場合もありうる。今日でも、産出地で入手できぬ品物が、他の地域で容易にしかも安價に手に入ることをしばしば經驗する。關連する數値が高いからといって安易に信用できないことは、ここからもあきらかである。流通機構や利用狀況を基礎から検討してみる必要がある。前後したが、鄭家駒氏は五代宋時代の官田、すなわち官所有の田土の經營形態を論じ、宋代における官田の所有率は次第に低下していくが、それは商品經濟の發達を意味し、同時に經營形態にも變化を生じさせたとする。

賈大泉氏は四川の商品經濟の繁榮と交子の誕生の關連から、商品經濟の發達とその各分野への影響を論じ、世界最初の紙幣の誕生は四川の高度な經濟發達の上に出現したとする。つまり、重い鐵錢を使用したいたことと僻遠の地ゆえに手形の必要性を生じたというような理由から紙幣の使用が始まるだけでない。高度な經濟發達の背景なくして紙幣の出現は有りえず、その便利さが四川を覆っていたが濫發が國家の介入を招いたとする。中國の貨幣經濟はまだ不明の點が多い。紙幣の流通は、大金を動かす場合の錢の不都合さを補うが、何故に紙幣の使用にジャンプしたのか、なお追及が必要である。經濟の發達は、時代の推移のなかでそれを支えるシステムを

シンプルにする。今日の貨幣システムもその證左の一つである。中國、さらには日本にも見られる複雑な錢の使用形態とどう關連するのか。以上の論稿だけでは分かりにくい。この問題に果敢な歛入れをしている宮澤知之氏の論稿にもあるが、當時の貨幣使用形態の原点にもどっての解明なくして理解は皮相なものに終る。前後するが、草野靖氏も南宋時代の東南會子の界制と發行額を検討する。東南會子は元來は兌換紙幣であったが、一一六八年に不換紙幣に變更され、それとともに三年間の有効期間制度を定めた界制も施行される。しかし、これはきちんと守られなかった。早くから規定を超えた六年間の使用や新舊兩紙幣の通行という混亂が見られた上に、金やモンゴルとの戰鬪が拍車をかける。經濟混亂に有效な手が打てないままに崩壊していく宋王朝の財政が、明確に論じられている。

梁庚堯氏は北宋神宗時代の西北邊境の軍糧調達問題を探る。軍事に關連した研究は重要でありながら等閑視されてきた。宋は文治國家というが、軍の比重が大きかったことは他の王朝といささかも變りなく、あらゆる面にその影が落ちている。それゆえに、軍事に關する研究は單に制度や經濟に關連するだけでなく、輸送や配分、さらには技術や生産など裾野がひろがる。そろそろ、専門の研究者の養成と幅廣い枠組みを形成することを考える必要がある。さて、氏は、經濟的裏付けのない無謀な軍事行動を西夏に對して行なった宋の政策を論じる。軍事行動は慎重な政策のもとに行なうのが常道だが、往々にして、そのような配慮なしに行なわれるのも事實である。氏は、西北方面での軍事行動準備の基本たる經濟政策が王安石の政策と重要な關係をもったこと、しかも成功しないままに軍事行動が行なわれたことをあげ、同時に、背景として當該時代の蝗害な

どによる經濟混亂をあげる。楊德泉・任鵬傑兩氏は熙寧・元豐時代の農田水利法の實施に關して、その地理的分布と社會的效果を考察する。約一億畝に及んだと考察される農田水利法は、全國的にかつ大規模に施行された。慎重に配慮された政策は王安石新法の要で概ね成功したとし、農田水利法を河北に施行した結果、江南の負擔を減じその發展を促進したと捉える。一定地域の發達に全般的な經濟政策がどう關係するか輕々には斷じられないが、興味ある見解である。ところで、江南の經濟力に關する論文を読むたびに考えるのは、淮南の狀況である。華北から江南へという圖式があるが、その間の淮南の狀況はどうだったのか。史料上の問題があることは承知しているが、この地域の研究を一層進める必要があるように思う。

V 政治 には Edmund H. Worthy, Jr. 「宋初の武力均衡政策」, Sasu-yü Teng 「王安石の改革運動新論」, 黃寬重 「南宋の茶商人賴文政の叛亂」, 陳高華 「蒙古使節王楙の南宋派遣について」, 衣川強 「劉整の叛亂」 などの論文があつまる。

Edmund H. Worthy, Jr. 氏の論題は、軍のコントロールに關する。よく知られているように、宋は軍の管制に腐心し、その結果として文臣官僚の登用があつた。これを、通常の指摘のようにシビリアン・コントロールという今日の感覺で捉えうるか否かはなお考察が必要だが、ここではその、異常なまでの軍の管制の問題を太祖・太宗の微妙な差異を念頭に論じる。Sasu-yü Teng 氏は、當を得、しかも雄大なスケールをもった王安石の改革運動の挫折を新論として展開し、優れた改革が挫折したのは結局、當の王安石も含めて人を得なかつたからだとする。この論文は人間社會に常に付きまとう挫折の多くが、當該社會の缺陷や認識の甘さからくる一方で、

人を得ないことにも求めている。しかし、人を得ないこともまた社會の構造や認識の甘さに求められるから、このような考察に際しては、その點を配慮する必要がある。鶏と卵の關係にも似るが、この種の考察の難しさでもある。

黃寬重氏は南宋の淳熙二（一一七五）年に起った茶商頼文政の叛亂を論じる。氏はこの叛亂を南宋の軍事・政治・社會の特質を明らかにしうる好例と捉える。專賣制度と政府の強行策が反撥を招き一般民衆の支持も得た叛亂を引起す。鎮定にむかった軍の規律の悪さが民衆の反撥を一層あおり、さらに現地の私的な武裝集團との取り引きを含みつつ、これを鎮定していくというのは、前近代中國における叛亂の典型的ケースである。この水滸の事件の展開のなかに、どう南宋代の特色を読み込むか。難しいところだが、宋朝はこの事件を分析し後の政策に反映させたとする。陳高華氏は蒙古使節王楙の南宋への派遣と欺瞞的な外交取り引きが續きえた理由を、權力者史嵩之の對應とからめて論じる。衣川強氏の論じた劉整の叛亂は、南宋末期の叛亂である。劉整は金から南宋へ、南宋からモンゴルへと魏晉南北朝的な動きをした人物であった。このような行動を何故にとったか。それは、賈似道の會計検査であったとしている。ただ、この會計検査の實施狀況は不明な點が多いようで、この説明はいささか迫力を缺く。

紹介したように、ここでは軍政に関する研究が多い。すでに示唆したように、この分野の研究を一層詰めなくてはならぬと考えている評者にとって推奨すべき傾向である。だが、より基本的な軍事システムの解明なくして、これらの成果は生かされない。ますます、軍事關係の研究推進の必要性を感じた。

Ⅵ 法制 は陳智超「宋代の書舖と訟師」、Herbert Franke「金朝の法律體系」、Brian E. McKnight「權力者の犯罪——陳執中の場合」、佐伯富「宋代における牢城軍について」、李涵「宋代の檢正と都司について」、梅原郁「宋代の郷司——その位置づけをめぐって——」、林天蔚「南宋機速房の設立より宋代の君主權と宰相權の昇降を論ず」、王曾瑜「南宋後期、揚州駐屯部隊の名稱と現存する揚州城砦文の檢證」などの論文である。陳智超氏は書舖について論じる。指摘のように、宋代の書舖には二つの意味があった。本屋と代書屋である。氏は、代書屋を取り上げ、その觀念が北宋以後確定していく経緯と内容を論じる。Franke氏は金の法律體系が部族的な色彩を残しつつも、中國的法定主義へ傾斜していくと論じる。とりわけ、社會の基本たる婚姻關係に女真人特有の習慣をひきずっているとの指摘には興味を感じた。McKnight氏は科擧出身にあらざる權力者陳執中の犯罪を通して、舊中國社會の上層部の法意識と倫理觀を探る。舊中國では、指導的立場にあるべき士大夫の犯罪が多く見られた。人民の上のしかるこの専横は、主として土地の占據、地方政治への關與などの面から捉えられてきたが、他の分野でも多く見られた。犯罪の本質を見極めるためには、かくのごとき微細な調査が必要で、取りわけ、科擧出身にあらざる權力者の犯罪の究明は、より深い實態を知る手掛かりになる。佐伯富「宋代における牢城軍について」は宋代の牢城軍についての考察であるが、ここでも手堅く手慣れた考察が目につく。

李涵氏は、宰相權に關して北宋より南宋にいたる長いタイム・スパンでその伸張を考察し、檢正ならびに都司は王安石の改革にともなって設置されたと論じる。このような考察が轉換期に出現した王

安石の改革の意味と影響を明らかにしていくことになる。梅原郁氏は不明な點の多い胥吏問題を論じ、郷司が都市または農村の胥吏とは別の形態をもって、獨自の位置を占めていたとする。胥吏の研究は宋代の實質的な支配形態を探るのに重要である。これをいままでの基礎的研究からジャンプさせるには、このように一つ一つ問題を解きはぐすことが重要である。相變らず目のつけどころの良い論文で、都市性と農村性を見極めるのに必要な作業である。林天蔚氏は、南宋初に設置され改廢のあった機速房を論じる。南宋史は四人の宰相で語ることが出来るといわれるが、細かい制度的裏付けはそれほど追及されてない。というより、研究そのものが、なお手つかずであるといったほうが良からう。氏は李涵氏と同様、この問題に分け入る。權力を構築しえた人物がいるとすれば、それを支えるシステムあつてのことである。さらなる説明が望まれる。王曾瑜氏の論稿は南宋後期の揚州出土の揚州城輒文と駐屯部隊の名稱に關するものであるが、骨子は軍制に關する。揚州城輒文は『文物』一九六二年十一期に紹介されたもので、宋代にはこのような史料の出現は餘り多くない。それだけに、貴重な史料で、その用途を示した論文である。

Ⅶ 宗教 には竺沙雅章氏「宋初の政治と宗教」の論文がおさめられる。竺沙氏は太祖・太宗の宋初二代の皇帝が、それぞれの差異を見せながらも、佛教と道教を用いたところから、宋代の隆盛が始まったと論じる。およそ、一國の、もしくは強力な權力體の誕生に際しては、それを支える強力な理論とイデオロギーが必要である。これは、中國史においても同様だが、宋の建國に際しても追及していく必要がある。儒學を規範にした科擧制度も建國と維持の論理と

して重要であるが、宋學成立までにはなお紆餘曲折がある。こうしたなかで、宋初に宗教の果たした役割の追及は重要である。そして、その宗教が何故に佛教と道教の二つであつたのか。これからの追及が必要であらう。それにしても、宗教關係の論文が一本であることは、はからずも、この分野が手薄なことを示す結果となつた。

Ⅷ 學術思想 には Conrad Schirokauer「宋代の史權」、饒宗頤「宋代の潮州に赴任した官僚と蜀學・閩學——潮州における韓愈尊崇の由來——」、朱瑞熙「宋代の理學家——唐仲友」、Richard J. Davis「南宋における歴史像の定型化の展開——史彌遠の場合」、陳學霖 (Hok-lam Chan)「宋・金の二帝、基て天下を争う——『宣和遺事』の史實——」、田浩 (Hoyt Cleveland Tillman)・俞宗憲「金朝の思想と政治制度について」がおさめられる。

Conrad Schirokauer 氏は宋代における歴史學者の權威を論じ、天の及ばぬところを君が補い、君の寄るものが歴史であるとして高く評價されたとする。そして、それは古典や精神に價値を求める中國人の共通の意識であつたとする。ただ、それが現實にどう反映したのか。歴史學者のもつ重みを改めて感じるとともに、それゆえに生じる思考の缺點もまた考える必要があるように思う。饒宗頤氏の論稿は興味深い。宋代の潮州に赴任した官僚と蜀學・閩學について論じるが、取りわけて潮州における韓愈尊崇の由來を検討し、唐代の皮日休に由來するとする。宋代になると科擧試験の盛行とあいまって地方學が發達し、儒學と教養としての文學の嗜みも一世を風靡する。地域の論理を究明するには、このような背景を一つ一つほぐしていく必要があることに目を向けた論稿である。朱瑞熙氏の論は惡名高い理學家唐仲友に關する。氏は唐仲友に對して一定の評価を

與えらうで、朱熹の彈劾の内容を検討する。こうした論旨のなかで興味を引いたのは史料のもつバイアスについての提言である。その意味で、ここで、注目したいのは、Richard L. Davis 氏の論文で、本書の中でも注目すべきものの一つのように思われる。史料そのものが含む問題について言及されたこの論稿は、宋代史研究の前に立ちかはる重要な問題を示唆する。本書でも、慧眼な宮崎市定氏がこの問題を念頭においている。だが、最近の日本の研究者にこのような視点が横溢しているかという点、必ずしもそうとはいえずに思う。最近の米國は宋代を擔った知識人の研究に優れた成果を生みだしているが、氏の提言も日本の誇る實證史學の弱點につき成果を超えるもののように思った。と同時に、先の朱氏、さらには宮崎氏の論稿と同様、史料のもつバイアスへの目が厳しくなってきたように思う。宋代の研究について新たな視點と方法が準備されつつあることは出来ないだろうか。

陳學霖 (Hok-lam Chau) 氏の宋・金の二帝が基で天下を爭ったという『宣和遺事』の記事に關する論は、あたかも壺中談を讀んでいるかのような氣にさせられた。宋・金兩皇帝に關するこの記事は、北宋の滅亡を含んで書かれているようだが、このようなエピソードをのせる『宣和遺事』のもつシニカルな面が明らかにになって面白い。と同時に、金という王朝に内在する正統性への希求への論となつてゐることも興味を抱かせる。かねてより、元好問の著書の『中州集』という表題が華北を捨てて南遷した中國人に對する金の正統性の自己主張の意味をもつことが指摘されてきたが、『宣和遺事』の載せる故事は南宋側の意識も傳えるように思えた。田浩 (Hoyt Cleveland Tillman)・俞宗憲兩氏が論じた金朝の思想と政

治制度についても同様の意識が窺えるように思う。金人の意識の向上は、周邊地域における中國文化の受容とそれにたいする見識、なにかんずく朝鮮半島のそれを検討する場合の對比史料となるのではあるまいか。

X 文學 には James M. Hargett 「陳興義の詩に見られる唐風と宋風の矛盾」、David Johnson 「見せ掛けの奇跡——十二世紀陝西の捏造された傳承」の論文を分類する。先のバラクラフ氏は日本の東洋史學を、基礎的な研究を受けていないために文學的なものにながれ、本來の歴史學者が氣づくべき問題に氣がついていないと指摘している。だが、皮肉なことに、ここでは日本人及び中國人の論文がない。これは、劉博士の研究分野が歴史學であることからきた歸結であろうが、同時に、中國の感性をすぐれて表現する文學の研究が漢字使用圈のみの獨占でなくなりつつあることを示すものとなった。グレーヴィチ氏が『歴史學の革新』（平凡社、一九九〇年）で豫言したように、次の歴史研究は文化的なものに移行していくのである。Hargett 氏は陳興義の詩を手掛かりに、北宋から南宋にかけての詩人陳興義の思想と行動をテーマに唐詩と宋詩の關係を論じ、同時に搖れ動く彼の心を推し量る。外國の文化の中でもっとも量りがたいものが文學で、詩がその最たるものである。異なる言語の壁を超えていく文學の理解は心性の問題に關わるからである。Hargett 氏はその難解な分野に挑まれているわけで、評者としては英譯された詩に多大の興味を感じた。David Johnson 氏は、傳說が意圖的に捏造されたことを確認できる珍しいケースを取り上げた。傳承や奇跡には意圖的に流傳したものと自然發生的に流傳したものと二つのケースがある。意圖的なものは流傳者の意圖を探り、自然發

生的なものは民衆の意識を探るのによい。そして、それゆえに兩者の差異を十分にチェックする必要がある。この分野で業績を挙げている氏だが、宋代史にもこのような傾向の論文が出だしたかと、一種の感慨をもった。

Ⅹ 書誌學 には王雲海『宋會要輯稿校補』續論——並びに藤田本『宋會要』『食貨・市舶』の稿本の検討』及び宋晞『宋史筌』遼・金傳を讀む』が分類される。王雲海氏の論文は、評者も多大の關心をもち小論も發表した我が國に招來された『宋會要』食貨の寫本の系統に關する。氏は校訂の末に廣雅書局本であらうと斷ずる。評者は中國現存の稿本を検討してないので何とも云えないが、從來の説が信じられぬとする見解には同感である。宋晞氏は朝鮮における宋史の編纂事業を通じて、朝鮮における宋學の影響を論じた。儒學の傳統を誇る半島ではあるが、その實態は案外知られていないように思う。評者は、最近、江戸時代の儒學に關する論著を讀んでいる。體制の異なる日本での宋學の受容と援用に興味を抱くとともに、彼等の學問の理解の差異を知ることが、ひいては中國の學問の本質を知る助けになると思うがゆえである。落差を知ることが、それぞれの高さや低さを知ることになるではないか。宋晞氏の論文は、この點に示唆を與える。しかも、このような研究が重要なのは、文化の繼承がどのように行なわれ、かつその影響がどのように浸透したかを考えることによって、その本質を考える手掛かりになるからである。體制も風土も異なる國々に受入れられた朱子學の本質は何か。例えば、江戸期の儒學を考えることによって、宋代儒學の本質に迫りうるのではないかとも思う。アジアに蔓延した學問の本質を捉えるためには、宋晞氏のような努力が續けられねばならな

い。

四

以上、各分野に分かつて紹介した。多彩な論文の集合體であるから、個々の論文への深入りを避け、できるだけ總合的な讀後感を述べることにした。その結果、宋代の研究が廣範な分野にわたって行なわれ、それなりの厚みがあることが改めて理解できた。もっとも、一つ一つ指摘しなかつたが、すでに指摘されある程度の成果を得ている事柄を念頭におかずに論じたもの、また、末枝に拘つたものもないではなかつた。これは、各國における相互の論文の不消化によると思われる。したがって、今後は是正されていくであらう。以後の成果を期待したい。このほか、これ以外にも行なわれるべき分野が多々あることが、改めて理解できることも本書の利點である。例えば、たびたび述べた軍制史である。この分野には時代を通じて些末な研究が若干あるのみで、壯大なスケールと視野のもとに軍制が中國の社會に持つた意味を追及するものはないに等しい。願わくばスケールの大きな論文がでて欲しいものである。

とはいえ、最初に述べたように、本書は劉子健博士の頌壽を記念して獻呈されているから、これだけで宋代史研究の傾向を論じるのは間違ひである。いうべきは、各國から廣範圍かつ高度な水準の論文を集めたという點であらう。それだけに、書評は評者の力量をはるかに超えた重い負擔であつた。誤つた獨斷や批評があつたと思うが、くれぐれもご寛恕願いたい。それにしても、本書が機になつてさらに國際交流が進むとともに、學術の向上が實現するように切に望みたい。これこそが、博士の願いであらうから。最後に、博士

の一層の健康と活動の發展を祈って擲筆する。

一九八九年九月 京都 同朋舎出版

B5判 七〇八頁 四九四四〇圓

吳樹平著

秦漢文獻研究

小林 春樹

秦漢時代に關係する史料のうち、『史記』や、近年發見された雲夢睡虎地竹簡などの諸文獻に對しては既に様々な研究が行われている。とりわけ前者については、『史記』學もしくは「司馬遷學」とも稱するべき新たな學問領域を形成し得るほどに膨大な「量」の研究が發表されており、そのことは周知の事實であらう。しかしそれとは對照的に、他の著作、例えば范曄のそれに代表される種々の『後漢書』、あるいはその祖本の一つとされたと言われる『東觀漢記』などについては極めて僅かな研究しか發表されておらず、それが中國古代史學史の一つの缺陷となっていたことも否定し得ない事實であった。

ここに書評を試みる吳樹平氏の『秦漢文獻研究』は、秦漢時代關係の文獻研究に存在するそのような間隙を埋める業績として貴重な著作であると思われる。

一

本書の構成を「目錄」に従って紹介すると以下のようになる。

雲夢秦簡所反映的秦代社會階級狀況

從竹簡本《秦律》看秦律律篇的歷史源流

竹簡本《秦律》的法律觀及其前後的因革